

『アダム・ビード』におけるヘイスロープと ヘティーの「閉塞性」について

矢野 奈々

はじめに

ジョージ・エリオット (George Eliot, 1819-1880) の『アダム・ビード』(Adam Bede, 1859) は、18世紀末から19世紀始めにかけての時代設定となっており、素朴な田園生活が描かれている。主な舞台となるヘイスロープ (Hayslope) は、起伏に富んだ肥沃な土地に位置する美しい景色の広がる村である。この村では時間がゆっくりと過ぎ、人々は牧歌的な生活を送っている。

そのヘイスロープのホール農場 (The Hall Farm) で働く小作人の姪、ヘティー (Hetty) は村で一際目立つ美貌の娘で、彼女の美しさとヘイスロープの美しさの一致については度々論じられている。しかし美しい外観とは裏腹に、ヘイスロープの美しい景色の陰に潜む 'ugly aspect'¹ に関しても George R. Creeger は指摘をしている。その例として、一見平穏に見えるヘイスロープの田園生活の中に、窃盗や暴力なども存在し、ポイザー (Poyser) 一家が寝室に銃を備えて生活している場面が挙げられる。また、村民の多くは、外部の世界と滅多に関わらずに、肥沃な土地で不自由のない暮らしをしている為、荒涼とした他の貧しい町に生活する人々の痛みを理解することができない。ヘイスロープの人々は、貧しい者の苦しみに共感することができないだけでなく、寛容な心を持つこともできない。彼らにとって「飢え」とは物質的な飢えだけを意味する為、見た目に貧しいと思われる者に対して冷ややかなのである。George R. Creeger はこのような心の狭いヘイスロープの人々の「精神的な飢え」² を指摘し、精神面での 'ugly aspect' を見出している。ヘティーにもこのような面が同様に見られるのである。

ヘティーは生来虚栄心が強く、日頃から贅沢な暮らしに憧れ、大地主の後継ぎであるアーサー (Arthur) との結婚に夢を抱くが、彼に誘惑された後に捨てられ、やがて途方に暮れて嬰兒を殺してしまう。彼女は、他人はおろか身内に対しても愛情が乏しく、他者の痛みを理解することなど一度もない。

Alan W. Bellringer が「ヘティーはヘイスロープの特徴を示している」³ と指摘しているように、ヘティーはヘイスロープの特質を象徴する人物なのである。この特徴には両者の美しい外観だけではなく、内面の醜悪もあり、それをたどっていくと、「閉塞」という面が見えてくる。そこで本論では、ヘイスロープとヘティーの「閉塞性」を中心に考察していくことにしたい。

(1)

ヘイスロープの人々は、代々伝えられてきた仕事や習慣を受け継ぎ、牧草の穫り入れ、麦刈り、収穫祭といった一定の平凡な生活を繰り返し、自分たちが守ってきた生き方に固守している。こういったヘイスロープの世界を藤井氏は「そこはこの世界の領域外で展開される社会的、政治的闘争から隔絶された場所」⁴と指摘している。確かに、ヘイスロープの人々は変則的なことや今までにない出来事が起きると、それらに対して嫌悪感を抱き、排除しようとする。こういった姿勢が外部との接触を失くし、「隔絶」の大きな原因となっているのであろう。

例えば、グリーン広場 (the Green) でメソジストのダイナ (Dinah) が初めて説教をした後、その事実を知った教区の庶務係ジョシュア (Joshua) は狼狽し、教区の牧師邸を訪れる。60年もヘイスロープで生活する彼が違う教派の説教を初めて目の当たりにし、怒りと反対をアーウィン牧師 (Irwine) に訴え、さらに以下のような不安を抱く。

“... But there's no knowin' what'll come, if we're t' have such preachins as that agoin' on ivery week — there'll be no livin' i' th' village.”⁵

メソジストの説教が今後も続いたら、何かが起こり、村に住めなくなるという身の危険を感じるのである。今までに経験したことのない出来事が彼らに起きると、それらを反射的に危機だと察知し、その内面や核心をつきつめる前に排除しようとする。つまり、物事を外面だけで判断してしまいがちなのである。この様子は、アーウィン牧師の母の言葉によく表れている。

“ Nonsense, child! Nature never makes a ferret in the shape of a mastiff. You'll never persuade me that I can't tell what men are by their outsides. If I don't like a man's looks, depend upon it I shall never like *him*. I don't want to know people that look ugly and disagreeable, ... ” (66)

外観が醜い (ugly) 人間とは知り合いになりたくないと語るアーウィン夫人は、人間を外面だけで判断し、内面を窺おうとはしない。見た目に醜い者や、好ましくない者に対する寛容的な気持ちは全くないのである。アーウィン夫人のこの言葉は、正にヘイスロープの人々の心の狭さ、乏しさを表している。

外面だけで判断することが正しいと考えるアーウィン夫人のように、ヘイスロープの人々は体裁を重視して生きている。たとえ身内と言えども一家の誇りを崩す者は許されざる者となってしまう。これはヘティーが嬰兒殺しの罪に問われて刑務所にいる事実を知ったポイザー一家の反応に見ることができる。

He and his father were simple minded farmers, proud of their untarnished character, proud that they came of a family which had held up its head and paid its way as far back as its name was in the parish register; and Hetty had brought disgrace on them all - disgrace that could never be

wiped out. That was the all - conquering feeling in the mind both of father and son - the scorching sense of disgrace,... (415)

ポイザー一家はヘティーに対する同情心は全くなく、一家の名が教区に記録され、借金をしないでやってきた家の出であるなど、誇りを持って生きてきた一家の顔に泥を塗られた恥辱感でいっぱいなのである。ヘイスロープは地主、小作人、農場労働者、大工とはっきりとした階級社会ができあがっており、既存する身分の枠、規則の枠などを超えずに、それぞれが枠の中で誇りを持って生活をしている。その為、既存するものを崩されたり、枠を超えられたりすることは人々にとっては相当な打撃となってしまうのであろう。自分達の枠を守ることは彼らにとって危機を回避することでもあり、生活を守ることでもあるのである。

この枠には、時間の枠も当然ながらに当てはまるのである。『アダム・ビード』には「時計」や「日時」の言及が非常に多いと言われている。そしてこの「時計」の針の規則的な動きについて Dorothy Van Ghent は「土壌や共同体に堅くしばりつけられた人達の思考や忍耐強いリズムなどを表す」⁶と指摘している。確かに人々は帰宅の時間や、教会へ出かける時間など、常に「時間」を意識し、決められた「時間」の枠の中で行動を取っている。ヘティーがいつもよりも30分遅れて帰宅した際、ポイザー夫人は“Look at the clock, do; why, it's going on for half-past nine, an' I've sent the gells to bed this half-hour, and late enough too,” (144) と言ってヘティーの遅い帰宅を叱っている。また、サイアス (Thias) の葬式や、アーサーの誕生祝賀会などヘイスロープで行われる冠婚葬祭に村民が一丸となって出席する様子には共同体への束縛がうかがえる。このような状況では、ヘイスロープの外の世界で起こりえる出来事や、新しい何かヘイスロープに入り込む余地などなく、村全体がヘイスロープだけの枠に閉じ込められたままなのである。

ポイザー一家が暮らすホール農場の描写は 'EVIDENTLY that gate is never opened' (72) という一文で始まる。さらに次のような描写が続き、長い雑草や毒人参が傍に生えている錆びついた門は明らかに開かずの門であることが分かる。蝶番の上で門を回すのに必要な力は計り知れなく、四角い石造りの柱を倒したりするほどのものだという部分からは皮肉さえも伝わってくる。

... for the long grass and the great hemlocks grow close against it! and if it were opened, it is so rusty, that force necessary to turn it on its hinges would be likely to pull down the square stone-built pillars, ... (72)

また、ドアについても 'it is never opened: how it would groan and grate against the stone floor if it were!' (72) と描写されており、門と同じく開かずのドアである。これらの開かずの門、ドアは閉塞したヘイスロープのメタファーとして捉えることができるのではないだろうか。様々な枠を超えることのできない人々の精神は、開かずの門、ドアであり、いつまでも閉ざされたままなのである。

(11)

次はヘティーに焦点を当てて見ていくことにしたい。ヘティーは自分の美しい姿を鏡に映し、自己に陶醉することが度々ある。「彼女は全くのナルシズムの世界に生きている。」⁷と言われるように、ヘティーは自分だけを愛し、自分だけの枠の中で生きている。鏡はこのような狭い枠の中で生きる閉じ込められたヘティーを象徴するものでもある。

ヘティーの寝室には古い鏡台 (the old-fashioned looking-glass) (148) があり、彼女は服を着る時にいつもこの古い鏡台が癪にさわり、「けったいな古い鏡！」(‘A queer old looking glass!’) (148) と思っている。なぜなら、かつては値打物であったこの鏡台も、今となっては酷く痛み、鏡一面にはぼんやりとした沢山のしみ (numerous dim blotches) (148) が浮かんでいる。しみはどんなにこすっても取れず、ヘティーはこれに我慢ができないのである。更に、鏡台を前後に傾けることができずに真直ぐに固定してある為、窮屈な姿勢で彼女の美しい首と頭の一箇所をのぞくことしかできない。

古い鏡に我慢ができないこのようなヘティーの気持ちと、ホール農場に対する彼女の気持ちには共通点が見られると考える。鏡台に対する「けったいな古い鏡！」という気持ちと同様の気持ちをホール農場、そしてそれをとりまく物、人々に抱いている。

Hetty could have cast all her past life behind her and never cared to be reminded of it again. I think she had no feeling at all towards the old house, and did not like the Jacob's Ladder and the long row of hollyhocks in the garden better than other flowers—perhaps not so well. … Hetty did not understand how anybody could be very fond of middle-aged people. And as for those tiresome children, Marty and Tommy and Totty, they had been the very nuisance of her life. (153)

ヘティーには過去の生活や昔の家など、古いものを懐かしむ気持ちや大切に思う心がなく、むしろ排除しようとする気持ちが強い。彼女は家族や他者との絆、連帯感を持っておらず、いつでもそれらを捨てることができると感じている。子供の頃からポイザー一家に面倒を見てもらっても、平気でそのような考えを持てる冷淡な人間なのである。ヘティーの冷淡な内面にポイザー夫人は気づいており、ヘティーの心を「石のように冷たい」(‘her heart's as hard as a pebble’) (155) と語っている。また、ジョージ・エリオットは外面の美を「美しき偽り」(‘dear deceit’ of beauty) (154) と描写し、外観の美しさが真の美しさではないことを指摘している。これは明らかに、ヘティーの偽りの美、内面の醜悪を読者に伝えている。

ヘティーは第二の親とも言うべきポイザー夫妻やその子供たちに愛情がないどころか、彼らの存在を鬱陶しく感じることが多い。中年の人を好きになる人の気持ちが彼女には理解できず、また、かわいい子供たちを「迷惑」(‘nuisance’) に思っている。つまり、ヘティーは嫌々ながらも仕方なく生活の為にホール農場で暮らし、心の何処かには好き勝手に振舞える自由な場所を求めていたのであろう。ヘティーはホール農場で家族と一緒に生活をしていても、絆や連帯感といったものがなく、自分だけの孤独な世界に遊離している。

ヘティーにとってホール農場のような存在である古い鏡台では、美しい自分の姿を自由自在に映し出す事ができない為、彼女は密かに自分で買った赤い小さな一シリングの手鏡 (a small red-framed shilling looking-glass) を取り出し、この手鏡に向かって微笑みかけている。この手鏡に映し出されるヘティーの姿は以下のように、ある貴婦人の絵のような普段とは違う「虚」のヘティーである。

She looked into it, smiling, and turning her head on one side, for a minute, then laid it down and took out her brush and comb from an upper drawer. She was going to let down her hair, and make herself look like that picture of a lady in Miss Lydia Donnithorne's dressing-room. (149)

ヘティーは日々、アーサーとの結婚を夢見て空想の世界に浸り、貴婦人のような格好をして鏡に映し出される自分の姿を見ては楽しんでいた。もしアーサーが自分と結婚してくれる日が来たら、ホール農場にはさささと別れを告げて、贅沢な暮らしをすることを密かに考えていたのである。しかし、封建社会のヘイスロープでは、地主の後継ぎと小作人の姪の結婚など、到底あり得ず、ヘティーの描いた夢はちっぽけな一シリングの夢に過ぎない。現実が見えていない彼女はその愚かな夢に気付かずに、盲目的にアーサーに夢中になっている。ヘティーが自分で買った手鏡は彼女の「虚」の姿を映し出すだけの物なのである。

このように、自分だけの空想の世界に浸るヘティーの様子を、ジョージ・エリオットは以下のように蝶のイメージを使って皮肉に描写している。

Young souls, in such pleasant delirium as hers, are as unsympathetic as butterflies sipping nectar; they are isolated from all appeals by a barrier of dreams. (101)

他人へ同情できないヘティーはもはや人間ではなく、他の生物によって例えられている。ヘティーがいかに人間に対して同情できないかというメッセージと、あらゆるものから隔離されている彼女の様子が強く伝わってくる。ヘティーの精神は夢の障壁によって隔離された彼女だけの世界にあるのである。

どんなに贅沢な暮らしを夢見ても、ヘティーの住む場所はホール農場であり、現実にはそこを抜け出すことなどできないのである。そして、ヘティーにとって思い通りにならず窮屈に感じるヘイスロープは古い鏡でもあり、古い鏡の「しみ」('dim blotches') はこすっても取ることのできない、人々の醜悪、ヘティーの醜悪を表しているのではないか。つまり、古い鏡がヘイスロープであり、ヘティーの「真」の姿をも映し出しているのである。枠 (frame) に囲われている鏡は、ヘイスロープという枠の中に生きる閉ざされた人々、そして自分だけの枠の中で生きているヘティーの閉鎖性を表すものとして捉えることができるのではないだろうか。

(III)

このように閉ざされたヘイスロープとヘティーを外の世界から眺めて、彼らに新しい風を送る

うと試みるのがダイナである。ダイナはポイザー夫人の姪でありながらも、ヘイスローブには住まずに、荒涼とした貧しい村であるスノーフィールド (Snowfield) で貧しい人々を助けて生活している。ダイナは時々、ヘイスローブを訪れることもあり、サイアスを失ったリスベス (Lisbeth) を助けて一家の悲しみに共感する場面がある。また、グリーン広場で今までに行われたことのないメソジストの説教を行うなどヘティーやヘイスローブとは対照的な行動をとっている。特に第15章の“The Two Bedchambers”では、自分だけの鏡の世界に没頭するヘティーと窓の外の景色に関心を注ぐダイナの対照的な姿が描かれている。ここではダイナの描写だけを見ることにしたい。

Dinah delighted in her bedroom window. Being on the second storey of that tall house, it gave her a wide view over the fields. The thickness of the wall formed a broad step about a yard below the widow, where she could place her chair. And now the first thing she did, on entering her room, was to seat herself in this chair, and look out on the peaceful fields beyond which the large moon was rising, just above the hedgerow elms. (155-156)

ダイナは部屋に入ってきて、最初に椅子に腰を下ろして窓から見える夜景を眺めるのである。この描写には、自分だけの枠に囚われないダイナの解放された心の世界が見えるのである。ダイナは外の景色を眺めつつも、この直後に様々な感慨に浸り、人々の身を案じ始め、やがて月光に照らされた田園風景を鑑賞する余裕を失くしてしまう。

… and the pressure of this thought soon became too strong for her to enjoy the unresponding stillness of the moonlit fields. She closed her eyes, that she might feel more intensely the presence of a Love and Sympathy deeper and more tender than was breathed from the earth and sky. (156)

ダイナは「愛」と「共感」の存在を強く感じて、目を閉じ、そして祈るのである。この部分には自分だけの幸せを求めるのではなく、他者との愛、共感を大切にするダイナの人格が表れている。

その後、寝室で静かに祈るダイナは、隣のヘティーの部屋から何かが落ちる大きな物音を聞き、その落ちた音から不吉な予感を抱く。この落ちた物とは皮肉にも、ヘティーの愛用する一シリングの手鏡なのである。ダイナの不吉な予感はさらに強まり、ついには彼女の空想の中に明白な形となって浮かぶ。それはヘティーが傷ついて血を流し、涙を流しながら救いを求めても、何の救いも得られない姿である。ダイナは居ても経ってもいられなくなり、ヘティーの部屋へ行き、何か困難が起きて、慰めや救いが必要になった時にはスノーフィールドに自分が居ることを忘れないでほしいとヘティーに対して愛情のこもった優しい言葉をかける。しかし、ヘティーはこのような心配をありがたく思わずに、いつか不幸に襲われるのではないかと恐ろしい気分になり、自分をこのような気分させたダイナに苛立ちを感じる。そしてヘティーは“Don't talk to me so, Dinah. Why do you come to frighten me? I've never done anything to you. Why can't you let me be?” (160) と叫び、ダイナはこの言葉に胸が痛む。自分だけの空想の世界を好むヘティー

にとって、現実には起こりえる困難と向き合い、友人の忠告を素直に受け止めることなどできないのである。しかし、ダイナ予感的中し、やがてヘティーの身に困難がふりかかる。

ヘティーはアダム (Adam) との婚約中に、アーサーの子供を懐胎した事実を知り、恐怖感に駆られて当てもないままヘイスロープを離れる。ヘイスロープの外の世界をさまよひ、ひもじい思いをし、絶望の淵に立たされた時に初めて、ヘティーはヘイスロープの村でかつて起きたある場面を思い出す。それは、ヘイスロープの教会で寒さと飢えから死んだも同然の姿で見つかった、腕に嬰兒を抱いた若い女性の姿である。ヘティーはヘイスロープを離れて、外の世界からヘイスロープを眺め、自分と同じ境地にあった女性の姿を思い出す。ヘティーの思い出の中の若い女性が、ヘティーの「真」の姿を映し出しているのである。そして、今まで鏡の中の「虚」の世界に浸ることが多く、現実味に欠けるヘティーがここで初めて現実の自分と向き合うのである。この章のタイトル “The Journey in Despair” に示されるように絶望の旅を経験することで、ヘティーの現実の「生」を見つめる目がようやく覚める。

The very consciousness of her own limbs was a delight to her: she turned up her sleeves, and kissed her arms with the passionate love of life. (389)

池に身を投げようとしても死ぬのが恐ろしくてできず、そのような状況の中でまだ自分が生きていることを実感した時、手足の感覚さえもがヘティーにとって喜びとなり、彼女は激しい生への愛をこめて腕にキスをする。これはヘティーが人間であることの証明を示す箇所であるとされている。⁸ しかし、人間らしさが初めてヘティーに現れ、若い女性を思い出して現実の自分と向き合っても、そこから先は行き詰まりになってしまう。ヘティーは若い女性のように他者に助けを求めることができない。

この女性は教区に救助されて世話になったのだが、虚栄心の強いヘティーはそのような助けを求めるのは自分には不可能だと感じる。そもそも、ヘイスロープの教区では、人々は貧乏に対してすら少々厳しい感情を抱いている為、そのような環境の中で育ってきたヘティーは到底、教区に助けを求めることなどできないのである。人の痛みを知らないヘイスロープの人々には、「欠乏」(‘poverty’) や「ぼろきれ」(‘rags’) といったものに同情する心などなく、それらを「怠惰」(‘idleness’) と「悪徳」(‘vice’) の印として見なすのである。

‘The parish!’ You can perhaps hardly understand the effect of that word on a mind like Hetty’s, brought up among people who were somewhat hard in their feelings even towards poverty, who lived among the fields, and had little pity for want and rags as a hard inevitable fate such as they sometimes seem in cities, but held them a mark of idleness and vice. (380)

このような状況を見る限り、ヘティーの性格だけの問題ではなく、ヘイスロープの村全体が何か困難の起きた時に助けを求めにくい環境を作ってしまったのが分かる。教区に頼れないヘティーは唯一、優しい言葉をかけてくれたダイナを思い出すが、ダイナに対してすら、助けを求めたり、心境を告白したりする気にはなれない。自分を救い出せる者は誰もいないと感じ、

自分の不幸や屈辱を知られてはならないと思うのである。

Hetty felt that no one could deliver her from the evils that would make life hateful to her; and no one, she said to herself, should ever know her misery and humiliation. No; she would not confess even to Dinah. (385)

もしヘティーがダイナに対して、助けを求めることができたのなら、閉塞状況を打破するきっかけを見つけられたのかもしれないが、この言葉に見られるヘティーの堅い決心は、打破の限界を表しているのである。

以前、村で行われたサイアスの葬式の場面では、ヘティーだけが悲しみを分かち合うことなく、独りでアーサーの事ばかりを想っていた。アーサーの誕生祝賀会でも同様にヘティーには他者との共感が見られない。ヘティーは「共感する力の全くかけた傍観者」⁹と言われているが、正しくそうであり、誰からの影響も受けず、そして与えずに閉塞的な自分だけの世界に留まる人物なのである。

(IV)

ヘティーが投獄された時、ダイナはヘティーを訪れ、彼女を改悛させる。ヘティーはそこで全てをダイナに告白するのだが、時すでに遅く、裁判で死刑を宣告される。アーサーが届けた赦免状のおかげで死刑を免れて流刑になったものの、当時の女性流刑者は流刑地の男性の慰み者になるのが落ちで死刑以上に過酷だったとされている。やがて刑期が過ぎて、オーストラリアからヘイスローブに帰国する途中でヘティーは病死してしまう。牢獄でダイナによって改悛しても、その後のヘティーの内面の変化は綴られておらず、彼女の最期は孤独で寂しいものであったことだけが分かるのである。

一方、ヘティーの犯した罪によって、アダムやアーサー、ポイザー一家に及ぼした影響は大きかったのだが、ヘイスローブの村全体は何ら変化もなく、淡々と時が過ぎていった。メソジストであるダイナは説教を行うなどして、新しい動きをヘイスローブに試みたが、こうした動きが人々の覚醒や改革に直接つながることはなかった。むしろヘイスローブは昔のままのヘイスローブであり続けた。ジョージ・エリオットが作中で 'Fine old Leisure!' (514) と昔の余暇の過ごし方を思い出し、懐古的な気分に浸っているように、ヘイスローブは依然として牧歌的な生活がゆっくりと続いている。

また、ダイナの叔母であるポイザー夫人は相変わらず、スノーフィールドに住む貧しい人々を助けるダイナの行動を理解することができなかった。どんなにダイナが貧しい人々の痛みを話しても、ポイザー夫人は彼らに共感することができないのである。そしてダイナに向かって "Wrong! You drive me past bearing." (476) と言い、ダイナの考えを間違いだと見なし、身内である彼女を苦勞のない豊かなヘイスローブで生活させようとするのである。それでもダイナはポイザー夫人の意見を押し切り、しばらくの間、スノーフィールドで困っている同胞と生活を共にする決意をする。

やがて、何年か経ち、アダムとダイナは結婚し、彼らの日常生活の場面で『アダム・ビード』が完結する。このアダムとダイナの日常生活を描いたエピローグでは明らかに変化したダイナの姿が見られるのである。

ダイナはアダムと結婚してから、ヘイスロープに移り住み、子供もできてすっかり主婦らしくなっていた。依然として身軽で活動的であることは変わらないのだが、人々を集めてメソジストの説教を行うダイナの姿はもう見られなくなった。なぜなら、メソジスト教会は女性が説教をするのを禁じるようになったからである。その為、ダイナは自分の家で人々に少々話すだけに止まり、公衆の場で説教をしなくなってしまった。

“Nay, sir, you can't do that, for Conference has forbid the women preaching and she's given it up, all but talking to the people a bit in their houses” (538) (下線筆者)

かつては、ヘイスロープに新しい風を送ろうとしたダイナもすっかりヘイスロープの村民となり、昔のように外部からヘイスロープを眺める存在ではなくなってしまった。いや、むしろヘイスロープの人間になってしまった為に、わずかではあるが時間の枠に囚われるようになり始めているのである。それが証拠に、ダイナが時間を気にする場面があるのである。

“He's been longer than he expected,” said Dinah, taking Arthur's watch from a small side-pocket and looking at it; “it's nigh upon seven now.” (537)

アーサーにもらった懐中時計を取り出し、「もう7時近くだわ」と言う。以前のダイナはこのように時間を気にすることなどなかったのだが、ヘイスロープに住むようになり、時間に囚われるようになっていたのである。また、公衆の場で説教ができなくなってしまうなど、ダイナはもはやヘイスロープに新しい風を送りこむ人物ではなくなってしまっている。ダイナは少しずつヘイスロープの生活に同化しているのである。つまり、下線部の“she's given it up”はダイナが説教を公衆の場でするのをあきらめただけでなく、ポイザー夫人を始めとしてヘイスロープに新しいことを教えることや、他者の痛みを理解してもらおうと説得することをあきらめたことと捉えることもできるのではないか。ヘイスロープに働きかけていたダイナという貴重な存在も、最後にはその影響力をなくし、ヘイスロープの「閉塞性」は変わらぬままなのである。

終わりに

ヘイスロープとヘティーにおける「閉塞性」に焦点を当てて考察してきたが、ヘイスロープはいつまでも閉塞的な村であり続け、そしてヘティーも閉塞的な内面を打破することはできないのである。また、ホール農場の開かずの門、ドア、そしてヘティーの寝室にある鏡の描写は、ヘイスロープとヘティーの閉塞性を表すメタファーとして用いられていると考えられるのである。ヘティーの悲劇的な結末は、彼女の性格が生み出したものであるが、それだけではなく、ヘイスロープの醜悪も関係するのである。「ヘティーはローム州（ヘイスロープがある州）の象徴であると

同時に犠牲でもある』¹⁰とされているように、物事を外面的にしか捉えることのできないヘイスロープの人々、そしてこれらを取りまく環境がヘティーの閉塞的な内面にさらなる影響を及ぼしていると言えるであろう。

また、スノーフィールドで生活をしてきたダイナが、最終的にヘイスロープに移り住むという結末にも、ヘイスロープとヘティーの「閉塞」打破への限界が読み取れるのである。ヘイスロープの地主の跡継ぎであるアーサーからの懐中時計をダイナが受け継ぐという事実は、時間の「枠」を始めとして、様々な「枠」の中に存続していくヘイスロープの生活を表しているのではないだろうか。

ジョージ・エリオットは、素朴な田園生活の中で起きたヘティーの悲劇を描くことにより、一見すると美しく見える村と人々の裏側に潜む問題点を読者に提示している。しかしその一方で、いつまでも古き良き時代を懐かしんで振り返ろうとする傾向がエリオットの前期の作品にはっきり表れていると言われているように¹¹、ヘイスロープの生活を懐古的に眺めている部分も見られるのである。エリオットが執筆している時代よりも、半世紀前の時代を扱い、幼年期を過ごした町での諸事件を想起しながら創作されているところに彼女のノスタルジアが感じられる。

エリオットは時代が変化していく過渡期の中で、新しい価値観を認めつつも、その変化に対して恐れや不安を抱いていた。ヘイスロープの人々が変則的なことや今までにない出来事が起こるとそれらに対して危険を感じ、閉塞した世界に留まる様子は、エリオットのこうした変化に対する恐れや不安の一つの表れでもあるのではないだろうか。そして、ヘイスロープとヘティーの「閉塞性」打破への限界は、変化しつつある社会に取り残されていく隔絶した村と人々の問題点として考えられる反面、その限界があるが故に、ノスタルジアを感じることでできる風土であり続けるといふ、相反するエリオットの思いが込められていると考えるのである。個人、そして一つの共同体が、社会の変化に目覚めていく姿は、エリオットのその後の作品に見えてくるのである。

注

1. George R. Creeger, *George Eliot: A Collection of Critical Essays*, (New Jersey: Prentice-Hall, 1970) p.87.
2. *Ibid.*, p.90.
3. Alan W. Bellringer, *George Eliot: Modern Novelists*, (New York: St.Martin's Press, 1993) p.28.
4. 藤井元子『歴史と文学—ジョージ・エリオットの小説—』(近代文藝社, 1995年) 77頁。
5. George Eliot, *Adam Bede*, (London: Penguin Books, 1985) p.60. 以下, *Adam Bede* からの引用はこの版によるものとし, これ以降の引用ページ数は本文中に括弧で示す。また, 所々に方言が見られる。このジョシュアのセリフは「しかし, あのような説教をさせておいたら, 何が起こるか分かりません。村に住めなくなりますよ」となる。
6. Dorothy Van Ghent, *The English Novel: Form and Function* (New York: Harper & Row, 1953) p.179.
7. Raphael Rudnik, *Eliot's Adam Bede*, (New York: Monarch Press, 1965) p.103.
8. Alan, *op.cit.*, p.28.
9. 藤井, 前掲書, 90頁。
10. George, *op.cit.*, p.97.
11. 藤井, 前掲書, 29頁。